く相當に行はれて居るらしい。而も之れを八、九歳から始めて親の死に至る迄確實に年金を生む男子に比べたら物の數でもあるまい。支那の女性に取つて最大の厄難は家母となる迄の間の婚姻生活である。大家族制の社會にあつては、結婚後の女性は嫁及び妻なる二重人格の持主となる。而して程度の差は社會及び時代の異なるに從つて異なるが、而も嫁たることの方が如何なる場合にも妻たることより重視せらるゝと云ふ原則に至つては決して變らない。妻としての支那女性の地位は、幾分か向上したと思はれる現代日本のそれに比べてすら高いと思はれる。申す迄もなく妻の地位は夫及び子との間の相對的關係によつて定まるものであり、妻の地位が子に對して夫同樣に高いのは孝道の重んぜられる支那として何の不思議もないが、夫妻の關係を所謂夫唱婦隨の絶對主義で規定して居る國柄に於いて、妻の實際的地位が動もすれば夫を凌ぐのは何故であらうか。支那の上流又は有識社會では、「畏內」といふ語が最大級の侮辱を意味する。それに拘らず實際に於いては「內を畏」れない夫の方が寧ろ少い程度である。私は其の理由を知らぬが、併し支那女性に通有の特色なる病的亢奮性が與つて力あることを認めるものである。斯くの如き性情が特に女性に限つて發達したのは、多分先天卽ち遺傳によるにあらずして、後天卽ち境遇が然らしめたものであらう。私は前に支那女性の家族內に於ける地位が奴隷的であると云つたが、このことは結婚後に於いて特に著しい。其の理由は第一に父母の愛撫から切り離されること、第二に妻としては假令夫の愛撫又は畏敬を受け得るとしても、彼女は妻たるよりは先づ嫁として族員に奉仕せねばならない義務を負うて居ること、第三に血統的には家と何等の關係なき存在に過ぎないこと、第四に牝牛が犢を生み及び勞役を供給する爲に贖はれると略々同樣な觀念から、異姓家族の中から聘財と云ふ身代金を支拂つて買入れられたもの（事實上の賣買婚）であること等による。日本の家族制に於いても婚姻後の女性が妻としてよりは寧ろ嫁としてより重く觀念されたことは最近迄の事實であり、現在でも姑嫁同居の家庭では此の痕跡が多分に殘存して居ることは吾人の日常見聞するところである。それですら日本の女性は其の不幸を嘆き、此の事實が夫の無節操とからみあつて自殺統計の數字の上に現はれて居る程だから、況して前記の如くに折重なつた壓迫の下に生活せねばならない支那女性が、或ひは病的亢奮性を帶びたり、進んでは廣東デルタの拒婚同盟と云ふが如き極端な事例を生み出すのは必ずしも不自然でない。

六　婦人運動の方向

大體右の如き狀態にある支那婦人の地位は、將來如何なる方法によりて何れの方向に進むものであらうか。此の問題は支那民族の政治經濟及び社會組織の一般的變革に順應してのみ決定さるべき性質のものではあるが、茲では假りに婦人問題だけを切離して取扱ふ外ない。一九一九年を起源とする支那の婦人運動は前にも一寸說及んだ通り自由主義・孫文主義及び共產主義の孰れかを其の指導原理として居る。自由主義的婦人運動の極致は、大體英米社會の旣に到達し得たところにあると見て大過あるまい。それは男女間に於ける政治及び法律上の形式的平等と、各家庭と云ふ極めて狹い範圍內に於ける消費生活上の實際的平等とである。而も女性の解放は決して完全に行はれて居るのでないから、女性側に不滿及び焦躁が殘ると同時に男性側では「美しい動物」の我儘と浪費とに困り拔いて居る。それでも大家族組織の鐵鎖の下に呻吟しつゝある支那女性から見れば、前記の如き不徹底

な英米社會の婦人解放すら、燦然として彼等の前途に光り輝くところの強い誘惑であるに相違ない。大都市の若い女性達が斷髪輕裝してカフエーやキネマの門口に自動車を乘附ける華やかな生活、之れが現代支那婦人の憧憬の的となつて居ることは少しも不思議でない。但しそれ等の女性達の中にすら稍々鋭どい理智のひらめきを持つて居るものであれば、多分歡樂極まつて哀愁生ずと云つた樣な物足りなさを感ずるものが案外多からうと思ふ。殊に右の如き自由な生活に入込むだけの餘裕を持たない側の人々は、寧ろそれの指導原理たるアングロ・サクソン流の自由主義に反感を懷くものさへあらう。而して後者は前者に比し壓倒的の多數を占めることであるから、自由主義的婦人解放運動は、今や支那に於いてすら既に時勢後れとなつたと見てよからう。之れを運動の實際に就いて見ても自由主義者の勢力は最早完全に孫文主義者に取つて代られて居る。ところで一體孫文主義なるものは多くの人々の批評する通り、其實雜なる寄木細工に過ぎず、婦人問題に關しても一絲亂れざる獨自の理論體體を持つわけではない。併し、それ故に孫文主義は無價値だと斷定するのは早合點で、孫文主義が支那婦人運動の指導原理として自由主義よりも優れて居る點は、寧ろそれの雜なる寄木細工たるところにある、と少くも私は考へて居る。尤も一口に孫文主義と云つたところで、孫文精神の正統的繼承者は先づ左翼國民黨であり、右翼及び中間派は嚴格な意味では異端と見てよからう。例へば右翼の理論的指導者達は　今尙ほ敢然として良妻賢母主義を主張する。之れは勿論近代的雰圍氣にふれた若い女性達の聞くを願はないところであるが、併し支那社會の全體から見るときは、斯くの如き思想も決して無意味のものでない。何となれば前述の通り支那婦人の最大の苦痛は實に彼女が夫の妻たるよりも家の嫁として取扱はれて居るところにあるからである。良妻賢母の思想は尙ほ著しく家族主義的臭味を帶びたもので、個人主義思想にさへ到達しないところの明かに時代後れのものであるところへ、嫁たる地位を言外に否定又は輕視して、妻及び子たる地位を高調して居るところに、中世的苦惱を抱く支那婦人に對する福音の意味が籠つて居る。

案外に長くなつたので、正統孫文主義及び共產主義者の婦人問題に關する理論及び行動は之れを他の機會に讓り、前に胡漢民氏の支那婦人觀を紹介した際に約束した問題だけを取扱ふことにしよう。胡氏は不落家の習慣が若い女性達の享有し得る經濟生活を基礎として起つたと主張した。今日の支那の經濟發達階段は多くの人々の諒解して居る樣な手工業時代に停滯して居るものではなく、多分明の中葉卽ち第十六世紀の半ば以來既に問屋工業時代に進み入つて居る。問屋工業時代は資本家的生產の優越が初めて確保された時代であり、同時に初めて女性が市場生產の分野に乘出した時代でもある。但し問屋から支拂はるゝ勞銀が彼女の獨立生活を保障するほど豐かでなかつた爲に、此の時代に於ける婦人の家族員としての地位は、彼等の經濟上新たに獲得した地位により殆ど全く改良さるゝところがなかつたと云つてよい。但し收入の少いのは主として婦人達が家庭の雜務に鞅掌する餘暇に働いた爲であり、從つて不落家の場合の家に家族關係から離れさへすれば、彼等は兎も角獨立生活を營むことが出來たのである。ところで工場工業の發達は貧家の女性達の地位に革命的變化を與へた。工場制にあつては先づ第一に工場が或る一定地域に集中される。第二に勞働が工場內に集中される。從つて問屋工業時代には農村に留つて居た女性達も、今日では家族から離れて工場所在地附近に移住しなくてはならない。玆に期せずして勞働婦人の家族生活から切離された獨立の生活が始まるのである。彼等は家族生活から離れたと云ふ點に於いて

より大なる自由を得るばかりでなく、仕事の續く限りはより豐かな收入を受ける。彼等は勞働組合に入込むことによりて、或る程度迄孤獨から免かれ且つ其の勞働條件の改善を計り及び勞働生活の維持に對する保障を得る。從つて順調なる工場勞働生活は明かに曩日の家内工業勞働に比べて彼女等の幸福であらう。併し工場勞働生活は殊に其の初期時代に於いて、農村裡の問屋工業勞働よりも彼等の健康を傷ふことが多い。病氣や失業や姙娠や同盟罷工と云つた樣なものが頻々と彼女の生活を脅かす。自由と獨立とを獲得した點では新時代は慥かに彼女に幸福を與へたが　併し此の幸福は決して無償で贖ひ得たものでなく、而も其の代價は前記の如く大である。之れを要するに支那の婦人問題も他の諸民族同樣、先づ婦人の經濟能力を問題解決の鍵とする。此の鍵を握ることなしに、政治・法律及び消費の上に男性と對等の權利を獲得したところで、それは畢竟沙上に建てた樓閣に過ぎない。貧家の女性が生活の必要上、他の社會層の同性に先だつて大家族組織から脫出し、支那婦人としては最初の獨立と自由とを贏ち得たことは前述の如くであるが、他の社會層の女性達も、彼等が大家族組織及び男性の覇絆から離れる爲には矢張り貧家の同性達が示した針路を追はなくてはならない。支那の婦人達も結局「人形の家」を基礎から掘返さねばならぬのであるが、其の爲には先づ自由主義者及び彼等の與へる幻影を突拔けて、孫文主義の正統的繼承者たる左翼國民黨の陣營に辿り着くことであらう。そこに彼女等を滿足させるものがあれば幸ひだが、時代は恐らく彼等の陣營をも乘越えて進むに相違ない。そこには極左民主主義者たる「中華革命黨」(所謂第三黨)があり、更に進んでは共產黨が控へて居る。支那の婦人運動が何れに終止するかは興味ある問題には相違ないが、併し今の我々の想像を超えた問題でもある。

(昭和四年一月『滿蒙』第十年第一冊)

編輯者後記

一

支那研究學者としての橋先生の學問的生活は、大體これを三つの時期に分つことが出來る。三十有餘年をこゆる長い學問的生活の第一期を劃するものは、およそ明治末年から大正十四年にいたる期間であるが、この期に於ける先生の研究は主として支那農村生活の中を流るゝ特殊な民族諸思想の究明にあつた。このために先生は、一方尨大な支那古典を渉獵しつゝこれら民族諸思想をその純粹な姿で把握すると共に、他方これが生きた具體的姿樣を、現實支那農村の實地踏破によつて明白ならしめようと努力された。そして先生の第一期に於ける學問的生活を特徴づけるものは、舊來日本の支那研究に强く根を張つた傳統的學風にアメリカ社會學の傾向を新たに取り入れたところに在る、といふことが出來よう。

このやうにして比較的平面的な姿をもつて出發した先生の支那研究は、大正末年を轉期として第二期にはいつたが、それと共に先生の研究方法は極めて立體的なものとなつた。第二期は、およそ大正十五年から昭和五年を包括する時期である。大正十五年に發表された『孫文の民族思想』(『法政經濟研究』第一卷第二號及び第三號)は右の如き第一期から第二期への轉換の道程に立てられた標識であるが、それ以後引きつゞいて、中國國民黨や中國

共産黨を中心とする支那近代民族運動に關する幾多の諸研究を發表された。とはいへ、先生の研究は決して單なる民族運動の表面の諸現象をのみ追つてゐたのではない。凡そ一九二四年を轉換點として、燎原の火の如く燃え盛つた支那近代民族運動をして、かく燃え盛らしめ、かく發展せしむる支那社會經濟構成そのものゝ分析が、いまや新たなる課題として先生の研究分野に取り入れられてきた。要言すれば、第二期に於ける先生の學問的活動は、支那近代民族運動の經濟的、從つて政治的・社會的研究にあつた。そして、こゝで特に留意すべきは、この期に於ける先生の研究方法が、いふところの新興科學を豐富に攝取して飛躍的前進をなしつゝ、我が國に於ける爾後の新たなる支那研究領域を開拓すべき魁けをなしたことである。

以上簡單にふれたやうな方向と內容とに於いて、支那研究學者としての先生の學問的生活は第一期から第二期へと進んだのであるが、かゝる進展の直接的契機となつたものは、既に指摘した如く、一九二四年に戰線の一時的統一に成功した中共・國民黨の合作勢力が、やがて苦難に充ちた支那近代民族運動の第一頁を開いたことであつた。ところがそれから凡そ六年目に滿洲事件の勃發と滿洲國の生誕があつて、より大規模な極東民族運動の序幕が切つて落されたが、謂はゞ第二のこの民族運動の展開が、啻に先生の研究對象に對してのみならず、その思想にも極めて顯著な影響をあたへ、かくすることに依つて、先生の學問生活に於ける第三の發展期が劃された。これはまことに興味ふかいことであらう。

滿洲事變がなほ發展の只中にあつた昭和六年十月に、先生が奉天で關東軍の中堅將校と會見された當時を回想しつゝ「私は東拓樓上の廣い粗末な應接室で、この異常なる國民的緊張の一絃にふれ、固より多少の感慨なきを得なかつた」と語つてをらるゝが、先生をして、長年の「自由主義と資本家的民主主義とに訣別」せしめ、いまや新たに「勤勞者民主主義——滿洲國のためには、特に農民主義をとりあげ、これを培養し鼓吹することに最も深い興味を覺え」しめたのである（橘樸先生「私の方向轉換」『滿洲評論』第七卷第六號三三頁）。まことに、この期に於ける先生の學問的活動の中心は、一方滿洲農民の、ひいては支那＝極東農民の運命に深い思ひを寄せ、他方この視角から日滿兩國民の間に新たに形成された共通的社會生產分業關係や、これに規制さるゝ滿洲國民經濟の基本的分析を行ひ、それの將來の發展方向を指示するところに在つた。第一期の學問的生活の中で發芽し、その後長く先生の胸深くに培はれてきた先生の支那古代民族思想は、一方第二期の學問的生活で獲得された科學的支那研究の成果と結合しつゝ、他方また極東社會に展開された新情勢に新たなる自己の生命を求めつゝ、いまや東天紅めがけて巢立つたのである。

支那研究者としての先生の學問的生活は、およそ右の如き三つの段階をふんで今日に及んでゐる。そして本書は、かゝる學的生活に於ける第二期の諸勞作を、より嚴密にいへば、この期に屬する支那社會經濟構成研究の主要部分を收錄したものである。

以下本書に收むるところの各章について、少しく說明を加へておかねばならぬ。先にふれたやうに、一九二四年一月に國・共の戰線統一に一時的成功をなした支那近代民族運動は、一九二六年七月にいたつて國民革命軍をして北伐の途につかしめたが、それは、同年暮から翌年初頭にかけての第一次・第二次上海ゼネラル・ストライキを經て、一九二七年二月の武漢政府樹立にまで發展した。丁度この頃、世界資本主義は、ヨーロッパ戰後の一

時的安定期から漸く第三期にはいつた。右のやうに、一時成功を收めたかにみえた支那近代民族運動も、この世界的動搖の波から脫れることは出來なかつた。一九二七年四月から五月にかけて、國・共兩黨は既に分裂し、一方、南京政府が形成さるゝと共に、他方やゝ遲れて海陸豐ソヴエート政府が樹立され、更らに後者は、一九三一年末の瑞金政權の確立にまで發達した。これに反して前者は、その樹立後一ヶ年にして早ぐも統一的覇權を放棄して、他方軍閥と同一列に墮ち、支那は再び收拾すべからざる混亂狀態を呈した。

支那近代民族運動の表面に、かくも嵐の如く起つたこれら一切の變化に克明な理論的分析を加へることが、第二期に於ける先生の主要任務であつたことは、既に指摘した通りである。とはいへこの理論的分析が科學的に嚴密であればあるほど、その分析はかゝる政治的諸現象を社會的經濟過程の運動法則に還元しなければならない。事實また、先生の研究もかゝる順序を追つて進んだ。

第一章第一節「舊支那社會に於ける資本家と地主」は『滿鐵支那月誌』昭和五年一月號及び二月號に載せられたものであり、支那社會の本來的な姿に於ける經濟的構成態を分析したものであつて、以下各章に對して序論的役目を果してゐると同時に、この課題について先生が長い年月にわたつて積まれた研究の總歸結でもある。これより先、支那社會經濟の現發展段階を如何に理論的に規定するかについて、資本主義社會說と封建的社會說とが對立し、やがて又アジア的生產樣式說がこの論爭に加つてきたが、右第一節の論稿は、これら三說を批判的に吟味しつゝ官人的前資本主義說なる先生自身の學說を積極的に展開したものである。『滿蒙』昭和三年四月號並びに同七月號にそれ〴〵載せられた第二節「支那農村の階級構成」稿と第二章第一節「帝國主義と農民經濟」稿は、その前年末海豐＝陸豐に樹立した最初の中國勞農政權の『土地問題黨綱草案』を批判の對象としたものである。そしてこの二つの批判論稿に於いて、先生は一方右の官人的前資本主義理論を支那農民經濟の生きた現實について具體的に展開すると共に、他方この視角からアジア的生產樣式理論に批判的吟味を加へられた。私の知る限りでは、後者の問題に關する先生のこの理論的吟味は、我が國の支那學界で最初の試みであつた。後でやゝ詳しくみるであらう如く、先生の理解に從へば、支那農民經濟の基礎的特徵は資本家的發展への見透しを失つた官人的地主と農民の結合的對立的關係にあるが、本來的にかゝるアジア的特殊性をもつがゆゑに、支那農民經濟はその再生產過程に於いて無限の循環を繰返さゞるを得ないのみならず、それ故にまた飢饉の永久的反覆に陷らざるを得ない。その上になほ軍閥の破壞作用が加はり、世界資本主義の壓力がのしかゝる。かゝる運命の下につながる支那農民にとつて、異鄕への流亡運動は不可避的なものであらう。第二章第二節「永久飢饉論」は（『上海日報』昭和五年二月八日乃至一七日）前者の問題の分析に當てられてをり、第二章第三節「支那農村の人口抱擁力」稿（『滿蒙』昭和五年七月號）から第四節「北滿洲農村の充實過程」（同上大正十五年八月號）並びに第五節「邊境農村の發生的考察」（同上大正十五年九月號）を經て第六節「新開地に於ける地主の機能」稿（同上大正十五年十一月號）にいたる四編は後者の問題を北滿農村の形成過程について具體的に分析し把握せんとした勞作である。注意深い人は、この第二章第三節以下第六節の諸論稿に於いて、今日の滿洲國農村政策の依つて立つべき基礎が、新國家建設に先立つ六年前に既に科學の光に照らし出されてゐるのを見逃さないであらう。たゞ惜しむらくは、先生の健康がこの優れたる北滿洲農村の發生史的研究を完成せしめなかつたことである。

之に反し、第三章第一節から第四節にいたる四編は、支那工業生産部門の基礎的特徴を所謂官僚資本と買辦資本との結節に見出さんとした先生の學問的努力であるが、第三章第一節「支那資本家階級の發生的考察」(『外交時報』昭和四年十月號)は、爾後の三節に對して總論的役目を果してをり、第二節「上海資本家階級の靜態的考察」と第三節「上海資本家階級の動態的考察」(『滿蒙』昭和四年十月號及び十一月號)は共に浙江財閥の分析を、第四節は廣東財閥の分析を夫々試みてゐる。先生が、かく支那資本家階級の性格分析に向はれたのは、これら資產階級を自己存立の物的基礎として昭和三年八月に一應支那の統一政權を形成した南京政權の本質を理解せんがためであつた。そしてこの理論的分析に於いて、先生が極めて明瞭に支那資本家階級の基礎を構成する官僚資本も買辦資本も、一部分は既に產業資本に轉化してはゐるが、なほそこには中世紀的信用を濃厚にもつ前期的存在であることを指摘してをられる。これは、清末＝民初の支那國家が、時には原始蓄積國家としての性格を表示しながらも、その後かゝるものとしての正常な發達をとげ得ない內因の一つを解く鍵として留意さるべきであらう。第四章第一節「支那勞働者の中世紀性」稿(『滿鐵調査時報』大正十五年九月號)は右の資本家階級の考察稿と補合關係に立つが、そこでは、支那勞働者が、いまなほ中世紀的土地所有から完全に解放されてゐないことが明白にされてゐるのみでなく、それは更に第二節「上海總罷工及び其の意義」(『滿鐵調査時報』昭和二年二月號乃至四月號)と合して、中國共產黨のよつて立つ基礎の一つとこのものゝ活動の社會的限界をよく示してゐる。

大正十三年十二月から翌十四年四月まで『支那研究』に引續き發表された第五章第一節「官僚の社會的意義」から第四節「官僚生活の營業性」稿にいたる四編と、第六章第一節「支那家族制度の破綻」並びに第二節「支那婦人の環境及び問題」の二編とは、右に簡單に紹介した第四章第二節以前の諸研究が何れも立體的であるに比して極めて平面的である、しかも兩者はその分析方法に於いてやゝ性質を異にしてゐる。にも拘らず、吾々がこれら六編の論策を本書の最後に收錄したのは、支那社會經濟構成に關する先生の積極的見解が、これら六編に展開された先生の實證的研究の中に用意されてゐるからである。このことは、次の吾々の說明に於いてより明白となるであらう。

二

前節に試みた簡單な說明からでも明白なやうに、本書に收むる諸論稿は、なんらか統一ある一定計劃のもとに書き上げられたものではなく、その時々の必要に應じて作られた個別的なものではあるが、然しそこには、支那社會經濟構成に關する先生の基本的見解が、一本の金絲の如く縫貫してゐる。一九二四年に起點をもつ支那近代民族運動の發展は、支那社會經濟構成の發達段階に關して、一方の極にラデックの商業資本主義說とこれの發展としてのトロツキーの地主ブルジョア化說を定置せしめ、他の極では、ブハーリン、アジアティクス等々の抽象的な封建制一般說を對立せしめたが、然しこの時點に於いて、マジャールはアジア的生產樣式說を提唱し、一九二七年の『中國共產黨土地問題黨綱草案』もこれを無條件に繼承した。

支那社會經濟構成の理論的規定に關する先生の積極的學說は、右三說への犀利な批判の形で現はれた。先生に從へば、宋に結成された專制的官僚群なる特殊社會層の存在が、支那社會の本來的意味に於ける基礎的特徴を制扼する。巨大な官僚群が彼らの掌握する政治的權力によつて社會的富を蓄積する速度は、經濟的構成態內に於け

るそれよりも遙かに大きい。官僚群の懷に蓄積された貨幣的富は、まづ支那の名譽ある財產形態たる土地に投下され、かくすることによつて、彼らは鄉紳として固着する。ところが、鄉紳による土地所有は、一方遺產均分制と農村過剩人口とのために細分化され、かくして形成さるゝ零細農耕は、やがて資本家的農業機構をそこに孕み出す餘地を全くなからしむるが、然しかゝる官人的土地所有＝零細農耕の下に結成さるゝ地代關係は、決して身分的隷屬關係を自らの本質とするものではない。それは土地の動員性によつて可能にされた自由契約を自らの本質とする。かくして、支那農村經濟は、資本制農業でもなく、況んやまた封建制農業でもない。これは、かゝる意味に於いて前資本主義制農業として規定されねばならぬが、その基本的特徵をなすものこそ、まさに官人的土地所有である。官僚と鄉紳卽ち士紳の富は、第二には質屋の營業資金に轉身して高利貸資本となり、ついでまた巨大商業や利益ある工業生產に投下される。支那に於ける工業生產の發達水準は、先生に從へば、農村に於ける廣汎な家內工業を基礎としつゝ問屋制手工業を自己の外業部に隷從せしむるマヌファクツール生產の段階にある。然るに支那工業が本來的マヌファクツール時代に到達したのは、凡そ一千年以前の宋代であり、それは更に明の萬曆年間に爛熟の域に達したが、その後それは、十八世紀末のイギリスが曾つて經驗した如き古典的方法をもつて正常に發達しないどころか、むしろ却つて萎縮さへした。これは何故であるか。先生はこの原因を追求して、士紳の政治的搾取が經濟的搾取を越えて行はれたこと、依然たる零細農耕の優勢、それ故に結果さるゝ自然科學の未發達等々を指摘された。

以上、先生の支那社會經濟構成に關する中心的見解を素描したが、然し先生の理論的分析は、これだけに止つてゐるのではない。先生に於ける右の如き支那社會の經濟的秩序への理論的分析は支那社會の歷史的發達過程への眞に科學的な分析をその背後にもつてゐるのであり、後者が前者をして自らの正當性を主張せしむる科學的武器となつてゐる。

支那社會發達の段階的區分づけに就いては、先生は長年月にわたつて異常な努力を傾けられたゞけに、この問題に對する先生の學說は、冒頭に摘記した如き三期の學問的生活を通して次第に變化し發達した。本書の各章の中で支那社會經濟史に關して相矛盾するが如き見解の存在するのは全くこれがためであるが、最近到達せられた見解は、大體次の如くに言ひ表はすことが出來るであらう。支那社會の出發點は、諸他の國々に於けると同樣に、氏族共同體にある。そしてこの時期は夏と殷とを包括する。ところが殷末にいたつて、氏族共同體社會は分散的封建制社會に移行し、後者は周に於いて開花した。支那社會のこの第二發展段階に於ける特徵は、井田なる莊園が變形されつゝもなほ强力に生存した農村共同體の上に築かれてゐたのみでなく、周國家の權力が、かゝる莊園の內部に及ばず、從つてそこでは地租と地代とが一致してゐた點に求められる。然るに周末に於ける鐵製農具の普及と灌漑施設の創設とによる農業生產力の發達は、やがて中央集權的封建社會の形成を可能ならしめた。支那封建社會のかゝる段階的推移は、政治的にみれば周の衰亡と秦の興隆であり、封建領主の支配に代る貴族の支配であり、經濟的にみれば徭役地代から現物地代への發達であつた。かくして、秦から唐にいたる約一千年の支那史は、中央集權的專制國家と土地貴族との不斷の鬪爭の歷史であつたが、この鬪爭は次第に前者の勝利に於いて發展し、國家の諸命令、就中その徵稅權が土地貴族の領有地內に及んだ。

然るに唐末に於ける軍事組織の畸形的發達は、所謂藩鎭の軍閥鬪爭を生じ、それから五代にわたる大動亂時代を造出した。この大規模な且つ深刻な戰亂によつて、既に頽勢にあつた土地貴族が先づ亡んでしまふと同時に、戰亂に從事する軍閥自體も、自らの鬪爭のために相ついで倒れた。宋初の社會はかくして、政治の運用にあたる一定の地位と素養とをもつた階級層の存在しない畸形社會であつたが、かゝる階級層を急速に創り出す手段として、宋以後の支那國家は既に前代に制定された科擧の制度を盛んに利用した。從來は補助的な意味をしかもたなかつた科擧制度が、宋以後、原則上官吏たる資格の唯一の源泉となつた。こゝに吾々は、宋から清にいたる一千年を通じて支配した巨大な專制的官僚組織の發生をみることが出來る。とはいへ右の如き專制的貴族組織から專制的官僚組織への交替といふ政治的變化は、次の如き經濟的變化をその背後にもつてゐるのみでなく、前者の變化は後者によつて初めて可能であつた點を看過すべきではない。卽ち中央集權的封建制が最高度に發達した唐三百年の太平は、支那本土の中心部分に於ける農業生產力を異常に高め、これは、やがてまた大運河の開通による南北交通の發達によつて一層促進されたが、商工業や金融業はこのために飛躍的進步をなすと共に、それは又反對に農業經營の市場依存性を高める要素となつた。のみならず、藩鎭に出發した唐末五代の軍閥は、農民を中古期莊園から解放して自由にその生產力を發揮せしむる如き情勢を打開して、進步的作用をいとなんだ。これら一切の緖要因の交錯點から、高度に發達した近世支那の商業資本が生み出されたが、かゝる前期的貨幣資本の蓄積は、いまや急速に一つの階級層として勢力を結成した巨大官僚群に集中されたことは、斷るまでもあるまい。宋から清にいたる一千年のかゝる支那社會の發達を、先生は名づけて半封建的商業資本の段階と呼ばれる。

右は先生の學說の輪廓であるが、支那社會の過去の歷史的發達過程に對する先生のこの研究、特に唐から五代を經て宋にいたる變革期の研究が、今日に於ける支那社會經濟構成に關する先生の學說の基礎をなしてゐる。これは、我國に於ける支那研究の自己批判とこれにもとづく新たなる再出發點に立てられた偉大なる金字塔の一つであつて、何人もその科學的功績を否定することは出來ないであらう。だが同時にまた、先生の長年にわたる歷史的理論的研究は、今後に於ける支那研究の發展方向を指示してゐる點に於いて、極めて重大な意義をもつてゐることも、否定すべくもない。とはいへ、先生の歷史的從つて理論的研究が、かゝる重大なる意義をもつことが明白であればあるほど、先生が吾々に與へられた此の科學的成果に對して、嚴格なる科學的批判の態度をもつて臨むことは、支那研究に從事する若い學徒の任務でなければならない。又かくしてのみ、我國の支那研究は、より高い段階に向つて進步することが出來るであらう。

この立場から、觀て先生の提起された諸問題の焦點に橫はるものは、唐から宋への支那社會の推移が中央集權的封建制から半封建的商業資本制への發達であると規定される場合、巨大な專制官僚群を中心に結節さるゝ外ならぬ半封建的商業資本制なるものゝ精緻なる理論的再吟味である。專制官僚群の手に蓄積さるゝ社會的富の源泉をなすものは、いふ迄もなく、農民の剩餘勞働であつて、こゝに爾餘一切の社會的諸關係を規制する基礎が橫はつてゐる。ところが、官僚の富は、宋以後に於ける商工業の急速なる發達と共に貨幣形態をとることゝ、凡そ明を轉期とする現物地租の半金納制地租への完全な進化とは、右の如き支那社會の基礎的關係に著しい近代的樣相

を帶ばしめ、農民を舊い身分的束縛から解放する。とはいへ、專制的官僚群と農民との間に、剩餘勞働の收取關係が成立しうるのは、かゝる基礎的關係自體がなほ封建的法則によつて貫徹されてゐるからに外ならぬ。それと同時にかゝる歷史的性格をもつ基礎的關係が堅固であればあるほど、工業生產に於ける資本家的發達の廣汎な道は塞がれざるを得ない。前期的官僚資本の投下によつて宋代に出現した支那のマヌファクツール體系が明にいたつて愈々强力に發達しつゝも、遂に自然科學的精密さにまで到達し得なかつた所以であり、このものゝ發達にかかる一定の限度の存在することは、反對にまた、右にふれた封建的法則の支配を强化する。この點に於いて、支那農民經濟の基幹的關係が秦・唐の農奴的關係から宋以降の自由農民的關係に進化したとする先生の理論規定は、再吟味されねばならない。そして、同時にこれは、現在の支那農村に於ける業主權關係や地代關係並びに零細農耕に關する先生の學說に對する再批判の根據を提供してゐるであらう。要約すれば、問題の焦點は、先生の學說の根柢に橫はる商業資本主義構成理論そのものに在る。先生によつて科學的支那研究の前面に提示されたこの問題は、一方理論的規定の精緻なる措定を要求すると同時に、先生によつて既に分析の基礎を與へたところのアジア的支配體制に特徵づけらるゝ士紳の緻密なる具體的分析を要求してゐる。

三

惟ふに、我國に於ける舊來の支那研究はその主要對象を王朝の興亡や佛敎・儒敎等のイデオロギーに置いてゐたのであり、又それはかゝるものとして世界的最高水準に立つてゐた。とはいへ、これらの舊支那學や舊支那史の研究は、社會的・政治的・觀念體系的・歷史的諸現象を生起せしむる支那社會の經濟的生活法則自體には、殆んど觸れるところはなかつた。他方また支那社會の經濟組織に關する諸研究が行はれたことはあつたとしても、それは廣さに於いても右の支那學や支那史の研究に到底及ぶべくもなかつた。支那に於けるギルド・手工帮・錢莊・商業・貨幣等々の狹少な範圍に於ける諸研究が、ただ斷片的になされたに過ぎなかつたからである。かくして此處には明白にすぎる學問的不毛が露呈されてゐた。

然るに、さきに指摘したやうに、一九二四年に起點をもつ支那近代民族運動の發展は、獨り我國の支那研究に對してのみならず、世界的規模に於ける支那研究に對しても、全く新らしい分野を開拓せしむることゝなつた。かゝる新分野展開の出發點に立てられた道標として吾々には、さきにふれた先生の諸研究の外になほ、作田博士の『支那國民經濟の特質』(『東亞經濟研究』大正十五年一月號)と伊藤武雄氏『現代支那社會研究』(昭和三年三月)とを見出すことが出來た。やゝ遲れて昭和四年十一月改刊第一號を出した滿鐵上海事務所研究室『滿鐵支那月誌』は、當時同樣にヨーロッパ諸國にも勃興しつゝあつた支那研究の新たなる科學的成果を我國に紹介しつゝ、既に右の如くにして釀成されてゐた新興支那研究の氣運を促進した。丁度相前後して刊行された鈴江言一氏『支那革命の階級對立』(昭和五年八月)と田中忠夫氏『革命支那農村の實證的研究』(昭和五年二月)とは、まさにかゝる氣運の所產であつた。一方ヨーロッパ、アメリカ諸國に於いても、既にエフ・フオン・リヒトホーフエン『支那』五卷(ベルリン一八七七年乃至一九一二年)の大著があり、フランケの『支那に於ける土地所有の法律的關係』(ライプチッヒ一九〇三年)や資料紹介の豐富な同『農耕と蠶絲業』(ハムブルグ一九一三年)、或ひはスミス『支那の

農村生活』（エザンバラ・ロンドン一九〇〇年）、李炳華『支那經濟史、特に農業に關して』（コロンビヤ大學一九二一年）や、遲れてワグナー『支那農業論』（ベルリン一九二六年）、ロッシング・バック『支那農家經濟論』（上海一九三〇年）等々があつたが、これらの地誌的・技術的記述を主要內容とする諸著作への批判の上に精緻なる理論を展開しつつ、まづマジャール『支那農業經濟論』（モスコウ第一版一九二八年、第二版一九三一年）が現はれ、ウイットフォーゲル『支那の經濟と社會』（ライピチツヒ一九三一年）が現はれた。前者の第一版が出たのは、まさに支那が一應青天白日旗の下に統一された年であつた。支那自體に於いても、これと同一の現象がみられた。然し不幸にしてそれは以上摘記したものに比しては何れも極めて低い理論水準に滯在してゐて、特に記述すべきものはない。

右の如く、凡そ一九二四年以降、支那社會經濟構成に對する嚴密な科學的研究が世界的規模に於いて展開したのであり、これらのものが依つて立つ學問的立場には全く相容れない二つのものがあつたにしても、それは何れも謎の國支那の深奧にひそむ神秘の鍵を解くべき一定の合法則性獲得を目指す點に於いては全く一致してゐた。そして此の點にこそ支那研究の新たなる時期を劃すべき特徵があつた。とはいへ、支那社會經濟構成の基底に流るゝ一定の合法則性の把握は、支那社會の歷史的發達過程の科學的分析によつて初めて完全なものたりうる。かかる科學的要請にもとづいて、支那社會史・支那經濟史の新たなる研究が最近にいたつて漸く盛んになつた。いまこゝでかゝる歷史研究に關する特殊論文の一々にまで立ち入ることはその處ではないが、さしあたり目ぼしい概說書のみをみても、既にサファロフ『支那歷史に於ける階級及び階級闘爭』（レーニングラード第一版一九一八年）から、コキン・バヽヤン『井田＝古代支那農業組織』（レーニングラード一九三〇年）を經て『封建社會の創生及び發展の基本問題』の中に含まるゝ「東洋諸民族における封建制度史の諸問題」（一九三四年）にいたる諸著述があり、またウイットフォーゲル『支那社會史の基礎及び諸段階』（『社會研究』パリー一九三五年第一號）や森谷克己氏『支那社會經濟史』（昭和九年十二月）がある。

新興支那研究は大體右の如き順序で發達しつゝ今日に及んでゐるが、かくの如き學問的研究の發達の中で、先生の諸研究が如何なる地位を占むるかは、マルクス主義支那史研究諸家が最近にいたつて到達した支那社會發達の段階的區分づけが、ほゞ昭和五、六年ごろに既に先生によつて定立されてゐることから見ても自ら明白であらう。勿論兩者の間には、それぞれの學問的立場の相違から結果する問題提出や問題規定上の差異があり、研究の深さと廣さに於ける隔りはある。然しながら、兩者の到達した結論自體から見れば、先生が數歩さきに進んでをらるゝことは、誰しも疑ふを許されない。

我國の對支政策が從來の一般的水準を遙かに乘りこえて前進しつゝあるいま、支那社會經濟構成に對する眞に嚴格な科學的研究は、我が支那研究學界が國家的に背負つた主要任務であり、切實な國民的必要であることは此處に改めて斷るまでもないであらう。本書に收めた先生の諸研究に個々の誤謬や缺陷の含まれてゐることは既に指摘した通りであるが、然しこのことのために、我國支那研究の新たなる領域の開拓といふ點に於いて、更にまた將來の支那研究の發展方向を指示せる點に於いて、先生がその學問的生活の第二期で既に果された先驅者的功績は毫末も傷けられない。我國に於ける支那研究學界は、我國の生んだこの學問的勞作を正當に評價しつゝ、自ら正しい方向に前進するであらうことを信ずると共に、かくすることに依つてまた、右に指摘した如き發展段階

編輯者後記

にある我國對支政策に鞏固なる科學的武器を與へ、これをより高い段階に發展せしむるであらうことを期待する。いまこのことを念ずるとき、いま又長い年月にわたる病氣と闘ひつゝもなほ我國支那研究の學問的發達のために三十有餘年の不斷なる努力を傾注された先生の足跡を思ふとき、ひそかに感涙の頰を下るを禁じ得ない。

筆を擱くに當つて、本書の出版につき異常なる努力を賜つた小山貞知氏と日本評論社に心からなる感謝を捧げると共に、本書の編輯者は、大塚令三、佐藤大四郎、松岡瑞雄、小泉吉雄、石田七郎、和田喜一郎、大上末廣の七人であることを明記して、責任の所在を明かにしておかねばならぬ。

昭和十一年三月二十八日夜

大上末廣識

昭和十一年六月十二日 印刷
昭和十一年六月十六日 發行
昭和十六年十二月一日 十版

支那社會研究 奥行
(検)定價 五圓

著者 橘(たちばな) 樸(ぼく)

發行者 東京市京橋區京橋三丁目四番地 鈴木利貞

印刷者 東京市小石川區久堅町百八番地 大橋松雄

配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地 日本出版配給株式會社

發行所 東京市京橋區京橋三丁目四番地 株式會社 日本評論社
電話京橋(56)(六一九一・六一九二)(九三・六一九四)
振替口座東京一六番

日本出版文化協會會員番號第一二二五四〇號

(共同印刷株式會社印刷)

(黒岩兄弟製本)

文學博士 稲葉岩吉著

增訂 **滿洲發達史**

盟邦滿洲國の健全なる發展を所期する者にはその前提として滿洲歴史の正しき把握を必要とする。本書はその代表的名著の一つであるが、秦漢以來現代に至るまでの滿洲における民族、政治、經濟、交通、社會、特に近接せる諸地方との交渉等細大洩らすことなく、卓越せる史眼と比類なく豐富な資料によつて描かれてゐる。

菊判上製 六一〇頁 定價 六・〇〇 送料 ・三〇

日本評論社版